

研究主題と取り組む中で学んだこと

学 校 長 田 口 則 良

「個が生きる授業の創造」から、新しい「個が生きる授業の評価」に研究主題が変わって以来、早、1年半が経過した。その間、主題について、理論的な話し合いをもったり、安彦忠彦先生や高橋超先生の御講話を聞いたり、また、各自、数回に渡って研究授業を行なったりして、精力的に研究主題にせまっていた。その過程で、筆者が学んだ2つの事柄について述べてみたい。

1. 自己評価活動の研究は、授業全体の研究とイコールである

自己評価力の育成は、子供自身が主体的にめあてを追求する思考の過程に添うものである。即ち、

- ① 自分自身のめあてをはっきりと自覚する段階
- ② それを常に意識しながら、めあてを追求していく段階
- ③ 途中でふり返り、更に新しいめあてを立てたり、追求の仕方を決めたりする段階（自己評価活動の段階）

以上の3段階が大なり小なり、すべての授業の根底にあり、それが学年差や学級差、教材の特性等によって、具体的な授業の姿としては、3段階を含めて、全く判別できないほど、変化している。

確かに、自己評価活動は、自分自身で行なった学習活動を見直すということであるから、自分でめあてや方法を設定することが前提になるし、また、それを主体的に追求していなければ、できないのは当然である。従って、自己評価活動は、3段階の中の1ステップとして位置づけてとらえられるのであり、それだけを他と切り離して研究することはできないのである。

2. 自己教育活動と学習内容の習得過程とは、表裏一体である

教科・領域の学習内容は、自己教育活動を通して習得される。即ち、前者が授業の目標であり、後者はその達成のための手段といえる。自己教育活動に基づいた学習の仕方によると、知識・技能は、長期記憶として定着し、実践力となり、信念にまで高まるといわれる。自己教育活動を通して学習することにより、学習内容は、盤石なものになって、身につく訳である。

他方、視点を変えると、教科・領域の学習内容を介して、自己教育力は体得されるのであり、後者が目標であり、前者が、そのための手段となる。自己教育活動は、具体的な学習内容を材料にしなければ、学べないのであり、自己教育力の育成だけの授業というのは成立しないのである。

しかし、その両者は、形式的には相互に、目的-手段関係ではあるが、授業の場では表裏一体であり、区別できない。従って、学習内容が子供の実態にフィットしていなければ、自己教育活動もスムーズに進行せず、自己教育力も体得されないことになる。その意味では、適切な学習内容の設定が、自己教育力の習得を図る「カギ」になる。

本書には、多くの授業実践が紹介されており、常に上述のような事柄にも留意しながら、研究が進められている。読者諸士の忌たんのない御意見がいただければ、幸甚である。